

C-9

ヒッタイト語のナラティブにおける歴史的現在の談話機能

大亦菜々恵（東京大学大学院、マールブルク大学）

【要旨】ヒッタイト語にはナラティブの文書の中で過去のことを現在形の動詞を用いて表す歴史的現在(HP)の用法があるが、これまでその機能については明らかにされていなかった。本発表では現存するヒッタイト語のナラティブ全てを集めたコーパスを使った上で、文脈が明らかな文書を選んで談話分析を行い、HPのジャンルの偏りや三人称主語との共起関係、そしてHPが出現するシチュエーションから、(a) ヒッタイト語のHPは事態が主人公にとって制御不可能で予期せぬものであることを表現するという意味的な動機によって現れることを明らかにする。そして同時に、談話の結束性の分析により、(b) 聞き手に注意を向けさせ、新たな登場人物を新情報であることをマークした上で突然談話に導入することを可能にする談話機能があることを示す。これまでの研究にはHPと情報構造の関連を指摘したものはなかったが、ヒッタイト語のHPにおいては意味的な動機、談話的動機の両方が重要であることが明らかになった。

1. はじめに

ヒッタイト語は紀元前1600年から1200年までの約400年間アナトリア地方（現在のトルコ）で使用された、文証されている中で最古の印欧語であり、アナトリア語派に属する。

例文を見る前に書記法について簡単に述べる。ヒッタイト語は粘土板の上に楔形文字で書かれているが、楔形文字には表音文字と表意文字が存在する。一つの表音文字は一音節を表し、音節構造の種類によって「母音」(a, e, i, u)、「子音+母音」(ka, ša, ta など)、「母音+子音」(ak, aš, at など)、「子音+母音+子音」(tar, ḫat, kat など)の4つに分類される。また、ヒッタイト語はシュメール語由来のシュメログラムと呼ばれる表意文字も用いられる。シュメログラムは大文字で書かれる。さらに音節文字によって表されるアッカド語由来のアッカドグラムも用いられ、斜体の大文字で書かれる。

ヒッタイト語の文ではシュメログラムとアッカドグラムが頻繁に出てくるが、発音する際にはどちらもヒッタイト語で読まれていたと考えられており、シュメログラムで書かれるLÚ.U₁₉.LU「人」もヒッタイト語の*antuḫša-*と読まれていたはずである。また、表音文字はそのままでも用いられるが送り仮名を伴うこともあり、*antuḫšan*「人を」をLÚ.U₁₉.LU-*an*のように語幹を表意文字で、屈折語尾を-*an*で表すことができる。この際もハイフン(-)は文字の境界を示し、接辞の境界を示すものではない。

2. ヒッタイト語の歴史的現在の問題点と先行研究

ヒッタイト語の動詞は人称（1, 2, 3人称）、数（単数, 複数）、法（直接法, 命令法）、時制（現在, 過去）、態（能動態, 中受動態）に従って活用する。時制には現在形と過去形の二つが存在するが、現在形を使うと現在のことに加え未来のことも表すことができる。アスペクトは動詞語幹に-*ške-*という接辞

をつけることによって未完了を表し、*have* に相当する *hark-*という助動詞と文詞を組み合わせることによって完了を表すことができる。

過去のことに付いて語るナラティブでは通常、過去に起こったことは動詞の過去形を用いて表されるが、ヒッタイト語には過去の出来事であるにもかかわらず動詞の現在形を用いて表す歴史的現在 (*historical present*, 以下 HP) の用法が存在することが知られている (Hoffner and Melchert 2008: 307-308)。しかしその機能に関しては多数の用例を用いた研究や文脈を考慮した分析が未だなされておらず不明で、HP の使用頻度なども明らかになっていなかった。

HP は日本語や英語を含めた様々な言語で存在することが知られている。ヒッタイト語以外の英語学や通言語的な研究では、伝統的には HP は物事を生き生きと描写する機能があるとする解釈がなされていた (*vividness*, Fries 1970, Langacker 1991 など)。その伝統的解釈に対して、Wolfson (1979)らは、重要なことが常に HP で表現されるわけではないことを指摘し、HP は単独で機能を持つわけではなく、過去形から現在形、またその逆の過去形から現在形への時制のスイッチこそが機能を持ち、長いテキストの中でシーンを区切る語用論的機能 (*segmentation*) があるとする説を提唱した。そのほか、Schiffrin (1981)、Cotrozzi (2010)、小玉 (2011)は Labov (1972)のナラティブ分析の枠組みを用いてそれぞれ英語、聖書ヘブライ語、日本語の HP を分析しており、語り手にとって予期せぬ (*unexpected*) 統御不可能な (*uncontrollable*) 出来事が HP の使用の動機となっているという説 (Cotrozzi 2010) などを提唱している。

3. 本発表の目的

本発表では、HP の十分な用例を用いて文脈を考慮した上でその機能を分析し、(a) ヒッタイト語の HP は事態が主人公にとって制御不可能で予期せぬものであることを表現するという意味的な動機によって現れること、そして同時に、(b) 聞き手に注意を向けさせ、新たな登場人物を新情報であることをマークした上で突然談話に導入することを可能にする談話機能があることを示す。

4. 方法

本研究では現存する全てのヒッタイト語の資料から、過去の出来事について語っている全てのナラティブ (年代記、神話、祈祷、条約の前文、手紙、勅令の前文) を集めたコーパスを用い、HP の用例を集めた。コーパス中 160 箇所で見つかったが、ヒッタイト語は粘土板の上に刻まれているため、ナラティブの中で HP が出てきているとわかっていても前後が破損して文脈が失われてしまっていることが多かった。そのなかで特に残りがよく、一枚の粘土板がほぼ完全に復元されていて文脈が把握できるスッピルリウマの事績 (KBo 5.6, CTH 40, HP 8 箇所, 全 167 行)を中心に質的な談話分析を行なった。

5. 全体調査の結果

(i)表 1 に示す通り、文書のジャンルによって HP の出現頻度が大きく異なることが明らかになった。HP の出現頻度が高かった神話、年代記、勅令の前文に共通するのは、どれも戦いのシーンや意外性のある展開などが含まれていることで、一方条約の前文、手紙、祈祷などはナラティブの分量は多くても、歴史的経緯を淡々と語るスタイルである。

(ii)HP の用例は全て三人称 (単数、複数) が主語であり、一、二人称が主語の用例はなかった。小玉 (2011:

122) の日本語の HP の研究でも三人称が主語の用例がほとんどで一人称が主語の用例は数少ないことが明らかになっている。

表 1. 文書のジャンルと HP の数

ジャンル	HP の用例	分析した文書数
神話	77	37
年代記、事績	69	2
勅令の前文	10	1
条約の前文	2	36
手紙	2	55
祈祷	0	18
合計	160	149

6. スッピルリウマの事績の分析

KBo 5.6 はムルシリ二世が書き記した父親のスッピルリウマ一世の事績であり、ムルシリ二世が一人称の語り手である。この文書には HP が 8 箇所出現し、それぞれの箇所に対してこれまで英語など他の言語で提唱されてきた仮説によって説明できるかを検証した。本発表では 8 つのテキストのうちのテキスト 1、3 の 2 例を取り上げる。また、HP の出現箇所は日本語や英語に直訳すると情報構造的に不自然になる特徴があるため、新たに HP が結束性と関係しているという仮説をたて、Halliday and Matthiessen (2014) の結束性の枠組みを用いて分析した。Halliday and Matthiessen (2014) は指示詞や代名詞によって以前登場したものを指すことでテキストに結束性が生まれると説明しており、指示詞や動詞の人称によって何が指されているのかをたどってつなぎ合わせることで結束性を可視化した Referential chains というモデルを提示しており、本研究ではこれを用いている。

□ テキスト 1: (1)-(5)

テキスト 1 は KBo 5.6 の冒頭であり、スッピルリウマが戦いから帰還するシーンから始まる。

- | | |
|--|--|
| 1) <i>nam-ma-ašš I-NA</i> ^{HUR.SAG} <i>zu-uk-ku-ki EGIR-pa ú-it</i> | 1) そして彼が Zukkuki 山に帰ってきた。 |
| 2) <i>nu 2 URU</i> ^{DIDLI.HI.A} <i>URU</i> <i>at-ḥu-li-išš-šša-an</i> ^{URU} <i>tu-ḥu-pur-pu-na-an-na ú-e-te-et</i> | 2) そして二つの(要塞化した)街、Athulissa と Tupurpuna を建設した。 |
| 3) <i>nu ku-it-ma-an URU</i> ^{DIDLI.HI.A} <i>ú-e-te-ešš-ke-et</i> | 3) (ヒッタイトが)その街を作っていたところ、 |
| 4) ^{LÚ} <i>KÚR-ašš-za wa-al-le-ešš-ke-ez-zi</i> | 4) 敵が自慢しはじめる。 |
| 5) <i>I-NA KUR</i> ^{URU} <i>al-mi-na-wa-ra-an-kán kat-ta-an-ta Ú-UL ku-wa-at-qa tar-nu-um-me-ni</i> | 5) 「Almina の国の下では私たちは絶対に彼を通さない。」 |
| 6) <i>ma-aḥ-ḥa-an-ma URU</i> ^{DIDLI.HI.A} <i>ú-e-tum-ma-an-zi zi-in-ne-et</i> | 6) しかし彼が街の建設を終えた時、 |
| 7) <i>na-ašš</i> ^{URU} <i>al-mi-na an-da-an pa-it</i> | 7) 彼は Almina の街の中に入っていった。 |
| 8) <i>nu-ušš-šši</i> ^{LÚ} <i>KÚR za-aḥ-ḥi-ya me-na-aḥ-ḥa-an-da nam-ma Ú-UL ku-išš-ki ma-az-za-ašš-ta</i> | 8) 戦いでは彼に耐えられる敵は誰もいなかった。 |

表 2. テキスト 1 のスキーマ

		1	2	3	4 (HP)	5	6	7	8
Hitt.	1. Supp.								
	2. towns								
Enemy	3. enemy								
	4. Almina								
unexpected		-	-	-	+	-	-	-	-
uncontrollable		-	-	-	+	-	-	-	-

この箇所では表 2 からわかる通り、それまでヒッタイトの街の建設の話をしていたところへ今まで全く触れられていなかった Almina の敵が(4)で突然現れ、自分達の守りの硬さを自慢し始めるところで一度だけ HP が使われている。ヒッタイト側にとっては予期せぬコントロールの効かない出来事である。また、*waleškezzi* には *-ške*-未完了接辞がついているが、ここでは *inchoative* の用法である。この箇所は日本語に直訳すると唐突に新しい敵が現れるので不自然になるが、「街を建設していたところ (突然) 敵が自慢しはじめる」というような状況設定の補いをすると意味が通るようになる。このとき、主語をハ格にすると不自然になる。

□ テキスト 3: (51)-(59)

テキスト 3 はスッピルリウマが街を征服して整備した後、冬を越すために首都ハットウサに戻ってくるシーンから始まる。王の不在の中ヒッタイトの街が部族に襲われ、皇子が交戦することになる。

- | | |
|---|--|
| 48) <i>nam-ma</i> ^{URU} [] <i>URU-an</i> ^{URU} <i>ma-na-zi-ya</i> -[...] <i>URUka-a-li</i> ^{URU}
<i>mu-na</i> -[<i>an</i>]- <i>da-aš</i> <i>URU-ya-an-na</i> <i>EGIR-pa</i> <i>ú-e-te-e</i> [<i>t</i> | 48) そしてさらに[...]の街、Manaziya-[...]の街、Kalimuna の街、[...]の街を再建した。 |
| 49)] <i>na-aš ta-ni-nu-ut</i> | 49) そしてその設備を整えた。 |
| 50) <i>EGIR-pa</i> Š[A <i>KUR</i> ^{URU} <i>a-at-ti i</i>]- <i>ya-at</i> | 50) それらをふたたび Hatti の国の一部にした。 |
| 51) [<i>n</i>] <i>u ma-aḫ-ḫa-an</i> [<i>KUR</i> ^{URU} <i>iš-ta-ḫa-ra ta-n</i>]- <i>i-nu-ut</i> | 51) そして彼が Istahara の街の設備を整えた時、 |
| 52) <i>na-aš</i> <i>EGIR-pa</i> [^{UR}] <i>ḫa-at-t</i> [<i>u-ši gi-im-ma-an-da-ri-ya-u-</i>
<i>w</i>] <i>a-an-zi ú-et</i> | 52) 彼はハットウサの街に冬を越すために戻ってきた。 |
| 53) <i>ÉRIN</i> ^{MES} <i>ŠU-TE-ma pa-an-ga-ri-it an-da a-r</i> [<i>i</i>] | 53) 部族の軍がひとまとめにやってくる。 |
| 54) <i>nu-uš-ši-kan A-NA KARAŠ</i> <i>GE₆-za an-da GUL-aḫ</i> -[<i>zi</i>] | 54) そして夜に彼の軍を攻撃する。 |
| 55) <i>nu A-NA ŠEŠ-YA DINGIR</i> ^{MES} <i>A-BI-ŠÚ pé-ra-an ḫu-u-i-ya-an</i> -
[<i>zi</i>] | 55) そして彼の父の神々が、私の兄弟の前を走る。 |
| 56) <i>nu-za</i> <i>ÉRIN</i> ^{MES} <i>ŠU-TE-I</i> ^L [<i>Ú</i>] <i>KÚR tar-uḫ-zi</i> | 56) そして彼は敵の部族の軍を打ち倒す。 |
| 57) <i>na-an-kán</i> [<i>ku-en-zi</i>] | 57) そして彼らを[殺す]。 |
| 58) <i>nu-za</i> <i>GIM-an</i> <i>ÉRIN</i> ^{MES} <i>ŠU-TE</i> ^{MES} <i>tar-uḫ-ta</i> | 58) そして彼が部族の軍を打ち倒した時、 |
| 59) <i>na-an</i> ŠA [^L] <i>KÚR KUR-e</i>]- <i>an-za a-uš-ta</i> | 59) 敵の国は彼を見た。 |

表 3. テキスト 3 のスキーマ

		51	52	53	54	55	56	57	58	59
Enemy	1. tribe (Kaskean)									
	2. enemy land									
Hitt.	3. Supp.									
	4. brother									
	5. gods									
unexpected		-	-	+	+	+	+	+	-	-
uncontrollable		-	-	+	+	+	+	+	+	+

テキスト 3 でも文脈と表 3 からわかるように、スッピルリウマが引き上げたのを見計らって(53)で部族の軍（カシュカ族）が突然談話に導入され、ヒッタイトの街を襲ってくる。この意外性は *pangarit* 「ひとまとめに」、*GE₆-za* 「夜のうちに」と語彙的にも表されている。また、(53)の=ma という接辞は話題転換の談話機能をもつものである。(53)-(59)は敵の部族と皇子の戦いが描かれているため、ヒッタイト王にとっては制御の効かないイベントであり、王不在の中皇子が敵を打ち破ったことも意外性のある出来事であると解釈できる。一方で意外性のなくなった(58)-(59)は過去形で語られている。日本語訳する際は直訳すると不自然になってしまうが、(53)「(するとそこへ突然) 部族の軍がひとまとめにやってくる。」と状況設定を補うと自然になる。ここでも、主語をハ格にすると不自然になる。

本発表ではテキスト 1、3 のみしか扱わなかったが、全てのテキストで仮説を検証した結果を表 4 に示す。

表 4. HP の仮説の検証結果

Theories	Text 1	Text 2	Text 3	Text 4	Text 5	Text 6	Text 7	Text 8
1. Vividness (Fries 1970)	+	+	+	+	+	+	+	+
2. Segmentation (Wolfson 1979)	+	+	+	-	-	+/-	+	+
3. Unexpectedness (Cotrozzi 2010)	+	+	+	+	+	+	+	+
4. Uncontrollability (小玉 2011)	+	+	+	+	+	+	+	+
5. Cohesion	+	+	+	+	+	+	+	+

Wolfson ら語用論学者は、伝統的もしくは物語論的な vividness の解釈に対して、重要なことが常に HP で表現されるわけではないことを指摘し、大きいテキストをより小さなテキストに区切る役割があるとしていたが、実際にはシーンの転換よりも出来事の意外性や制御不可能性のほうが HP と共起していることが明らかになった。Wolfson のシーンの転換説は、次のようなシーンが転換しているにもかかわらず HP が現れない場合の説明ができない。

□ テキスト 9 : (36)-(52)

36) <i>nu-za</i> KUR ^{URU} <i>ka- šu-la hu-u-ma-an tar-aḥ-ḥe-er</i>	36) 彼らは Kasula 全土を征服した。
37) <i>na-at IŠ-TU</i> NAM.RA GUD UDU- <i>ya MA-ḤAR A-BI-YA ú-te-er</i>	37) そしてその人民、牛、羊を私の父の前带到了。
38) <i>nu</i> NAM.RA ^{MEŠ} [<i>ku</i>]- <i>in ú-wa-te-[er] na-aš 1 LI-IM e-eš-ta</i>	38) 彼らが連れてきた人民は 1000 人であった。
39) <i>nu-za A-BU-YA</i> KUR ^{URU} <i>tu-u-ma-an-na hu-u-ma-an tar-aḥ-ta</i>	39) そして私の父は Tumanna の全土を征服した。
40) <i>na-at ú-e-te-it</i>	40) そしてそれを(再)建した。
41) <i>na-at ta-ni-nu-ut</i>	41) そしてその設備を整えた。
42) <i>na-at EGIR-pa ŠA</i> KUR ^{URU} <i>ḥa-at-ti i-ya-at</i>	42) そしてそれを再び Hittite 国の一部にした。
43) <i>nam-ma-aš EGIR-pa gi-im-ma-an-da-ri-ya-u-wa-an-zi</i> ^{URU} <i>ḥa-at-tuši ú-it</i>	43) その後彼は冬を過ごすためにハットウサの街に戻ってきた。
44) <i>ma-aḥ-ḥa-an-ma-za-kan</i> EZEN ₄ MU.KAM- <i>ti kar-ap-ta</i>	44) 彼がその年の祭儀を執り行ったとき、
45) <i>na-aš I-NA</i> KUR ^{URU} <i>iš-ta-ḥa-ra pa-it</i>	45) 彼は Istahara の町へ行った。
46) <i>nu-za</i> ^{URU} <i>iš-ta-ḥa-ra ku-it ŠA</i> [KUR ^{URU} <i>ḥa</i>]- <i>at-ti A.SÀ</i> <i>A.GÀR-an LÚKÚR</i> ^{URU} <i>ga-aš-ga-aš da-a-an [ḥar-ta]</i>	46) そして Kaska の敵がヒッタイトの領土である Istahara をとっていたので、
47) [<i>A-BU-YA</i>]- <i>kan LÚKÚR ar-ḥa ú-i-ya-at</i>	47) 私の父は敵を追い出した。
48) <i>nam-ma</i> URU[] URU- <i>an</i> ^{URU} <i>ma-na-zi-ya-[...] URUka-a-</i> <i>li-mu-na-[an]-da-aš</i> URU- <i>ya-an-na EGIR-pa ú-e-te-i[t</i>	48) そしてさらに[...]の街、Manaziya-[...]の街、Kalimuna の街、[...]の街を再建した。
49)] <i>na-aš ta-ni-nu-ut</i>	49) そしてその設備を整えた。
50) <i>EGIR-pa Š[A</i> KUR ^{URU} <i>ḥa-at-ti i]-ya-at</i>	50) そしてそれらを再び Hatti 国の一部にした。
51) [<i>n</i>] <i>u ma-aḥ-ḥa-an</i> [KUR ^{URU} <i>iš-ta-ḥa-ra ta-n</i>]- <i>i-nu-ut</i>	51) そして彼が Istahara の街の設備を整えた時、
52) <i>na-aš EGIR-pa</i> [^{UR}] <i>ḥa-at-t[u-ši gi-im-ma-an-da-ri-ya-</i> <i>u-w]a-an-zi ú-it</i>	52) 彼はハットウサの街に冬を越すために戻ってきた。

ヒッタイト語の粘土板にはシーンを区切る場合、粘土板上に長い横棒（パラグラフライン）を引く習慣があり、HP とパラグラフラインは共起するわけではないことも明らかになった。

結果として、HP は意味的には vividness、unexpectedness、uncontrollability と共起し、結束性の観点から見ると談話の中に新たな要素を導入する場合に HP が出現することがわかった。vividness に関しては、unexpectedness が HP 使用の動機となっているが、それによってもたらされる文体的効果として vividness が感じられるという説明ができる。

7. 考察

コーパスを用いた分析の結果として、次の5つの事実が明らかになった。(i) 歴史的現在の頻度はジャンルによって大きな偏りがある(140以上の用例が神話と年代記からのもので、経緯を淡々と語る条文の前文や祈祷には現れない)。(ii) HP は3人称主語の時のみ現れ、一、二人称が主語の用例が存在し

ない。(iii) スピルリウマの事績の中で HP が現れる全ての文脈には、状況が物語の主人公にとってコントロール不可で予期していないものである点が共通している。(iv) Halliday and Matthiessen (2014) の referential chains の結束性の分析をすると、談話の中にそれまで登場していない完全に新しい登場人物が主語として突然登場する場合に HP が現れている。(v) 日本語訳する時に主語をハ格にして逐語訳すると不自然になるが、主語をガ格にして、「突然」というような副詞を付け足すと自然な訳になる。

(Kuroda (1972) 以来、日本語の「ガ」と「ハ」は thematic (無題) / categorical (有題) sentence の対立を表していることが言われている。ヒッタイト語には thematic/ categorical をマークする方法はないが、HP が現れる文は意味的に thematic であると言える。)

(i)-(iii)の事実によってヒッタイト語の HP は事態が主人公にとって制御不可能で予期せぬものであるときに使用されると言える。

Fleishmann (2005)は過去について語るナラティブテキストでは、ほとんどの出来事が過去形で語られるため、現在形は過去形に対して有標であることを指摘している。(iv)と(v)の事実からヒッタイト語の HP にはナラティブにおける有標性によって聞き手に注意を向けさせ、新たな登場人物を新情報であることをマークした上で突然談話に導入することを可能にする

談話機能があると説明できる。これまでの研究には HP と情報構造の関連を指摘したものはなく、意味的な動機だけでは HP の出現を予測したり説明したりすることが難しかったが、ヒッタイト語の HP においては意味的な動機、談話的動機の両方が重要であることが明らかになった。

参考文献

Cotrozzi, S. 2010. *Expected the Unexpected – Aspects of Pragmatic Foregrounding in Old Testament Narratives*. New York and London: T&T Clark.

Fleischman, S. 2005. *Tense and Narrativity: From Medieval Performance to Modern Fiction*. Austin: University of Texas Press. (1st ed. 1990.)

Fries, Udo, 1970. Zum historischen Präsens im modernen Englischen Roman.(On the Historical Present in the Modern English Novel). *Germanisch- Romanische Monatshefte* 51, 321–358.

Halliday, M. A. K., & Matthiessen, C. 2014. *Halliday's Introduction to Functional Grammar (4th ed.)*. London and New York: Routledge.

Hoffner, H. and Melchert, C. 2008. *A Grammar of the Hittite Language*. Winona Lake: Eisenbrauns.

Kuroda, S.-Y. 1972. "The categorical and the thematic judgment: Evidence from Japanese syntax." *Foundations of Language* 9. 153–185.

Langacker, R.W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar Vol. II Descriptive Application*. Stanford University Press, California.

Wolfson, N. 1979. The Conversational Historical Present Alternation. *Language* 55, no.1: 168-182.

小玉安恵 (2011) 「体験談における歴史的現在の機能と視点」『日本語教育』148号, 114–128